認知言語学と英語教育

濱　田　英　人

1．はじめに

言葉は伝達したい出来事を単に伝えるだけでなく、話者がその出来事をどのような視点から、どのように捉えているかをも同時に反映しています。これはちょうど絵画がその描いている対象と同時に画家がそれをどこから描いたのかを伝えているのと似ています。つまり、記述対象の出来事を能動文で表現するのか受動文で表現するのか、また、過去時制を用いるのか現在完了を用いるのかといった選択そのものに話者の出来事の捉え方がすでに現れているのです。この意味で、文の構造や文法的要素は話者の出来事の認識の仕方を表すいわば慣習化した概念的道具であるということができます。

小稿では認知言語学の視点から言語と人間の認識作用の問題を扱い、このことが言語教育に有益であることを示したいと思います。そこで、次節ではいくつかの言語現象を観察する前に、認知文法の言語観について述べたいと思います。

2．認知文法の言語観

認知文法の基本的な考え方は『言語表現は人間の認識作用を反映する』というものです。つまり、出来事をどのように捉えているかということが言語表現に反映されるということです。そして、この出来事の捉え方には一定の原理があることが知られています。たとえば、話者は何らかの意味で目立って認識されているものを主語にしてその主語について何かを述べます。このとき、何が

目立って認識されやすいかには一般的な傾向があり、人と物を比べると人の方が目立って認識されやすく、動くものと動かないものでは動くものの方が目立って認識されやすいと言えます。また、この目立って認識される要因には発話の場面も大きな役割を担います。たとえば、唐突に誰かのことを話題にして話をする場合もありますが、すでに誰かのことが話題になっている場合にその人を主語にして何か情報を聞き手に与えることは日常よくあることです。

また、この「目立って認識される」ということから自然に説明できる言語現象も沢山あります。たとえば、次の文を見てみましょう。

(1) a. This one I will take.

b. At the edge of the lawn, a line of fuchsias grew like little symbolic trees. In front of the fuchsias lay a shallow garden pool, . . . (*The white Quail* by John Steinbeck)

(1 a) は買い物で店員に特定のものを見せてもらっている場面ですが、ここで話者が *this one* と最初に言ったのは会話の場面からそれによって指示されている物が目立って認識され話者の意識の前面にあるからです。つまり、話者は目立って認識されているものをまず言語化し、それに続けて文を整えているということです。同様に (1 b) は小説の一部ですが、前文から話者や読者の視点は *fuchsias* に向けられています。つまり、それが意識の前面にあるために次の文でまずそれを言語化し、いわば *fuchsias* からその前にある情景へと視線を誘導するように文を構成していると言うことができます。

また、目立って認識されているものをまず言語化するという意味では次の例も同じ原理が働いています。

(2) a. Don't leave the fridge open.

b. 扇風機が回っている。

(2 a) では『冷蔵庫を開けっ放しにしないで』と言っていますが、厳密には冷蔵庫のドアです。同様に (2 b) では回っているのは扇風機のハネの部分です。このような言語現象をメトニミーといいますが、私達は一般的に部分よりも全体を目立って認識しやすい傾向があるためこのような言い方をするのです。

このように「人間の認識」の視点から言葉を考える認知文法では『人間の知覚と認識の平行性』を非常に重視します。つまり、「知覚と認識は似ている」ということです。たとえば、次の 2 つの文を比べて見てください。

(3) a. ここからだと函館はまだかなり遠い。
　　b. 彼は遠い存在だ。

(3 a) では物理的世界の実際の距離が遠いということですが、(3 b) は話者と彼との精神的な距離について述べています。つまり、「遠い」という表現は物理的知覚にも心的な認識にも使うことができるわけですが、これはこの 2 つの概念が似ているからだと言うことができます。

また、『言語が人間の認識作用を反映する』ということをもう少し推し進めて考えてみると、話者の認識作用が表現の意味に大きく関わることがあります。たとえば、*across* という語は「～を横切って」という意味の前置詞ですが、次の 2 つの文では「何が横切っているのか」という点で異なっています。

(4) a. John walked across Maple Street.
　　b. The building is across Maple Street.

(4 a) の文は話者がジョンの動きを目で知覚しそれを言葉に表現しています。つまり、横切っているのはジョンです。それに対して (4 b) では何も動いているものはありません。動いているのは「話者の視線」です。つまり、話者が起点（あるいは現在位置）から目標物である建物までを頭の中で視線を移動させることが *across* という語で表されているのです。

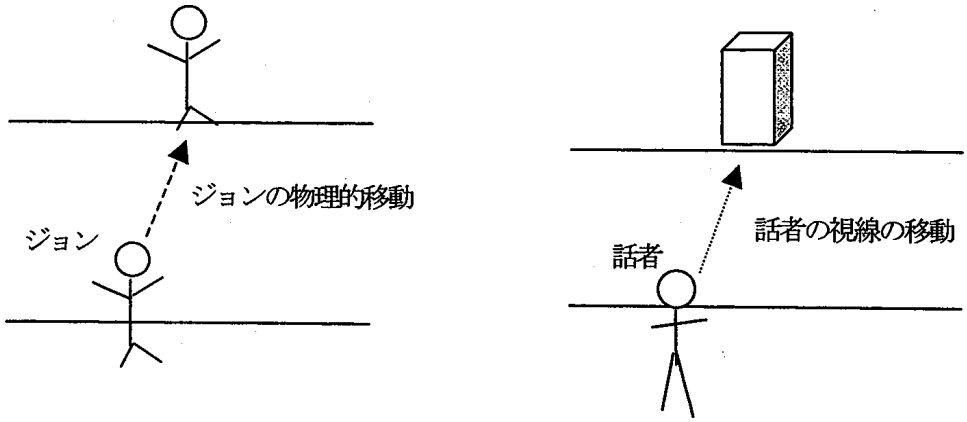


Figure 1

このことに関係して更に付け加えると、話者が出来事のどこに意識を向けているかの違いが語彙化の違いとなって現れることもあります。たとえば、choose（選択する）という行為を考えてみましょう。これは「いくつかの選択肢の中から特定のものを選ぶ」ということですから、この行為全体を図で示すと図2のようになります。

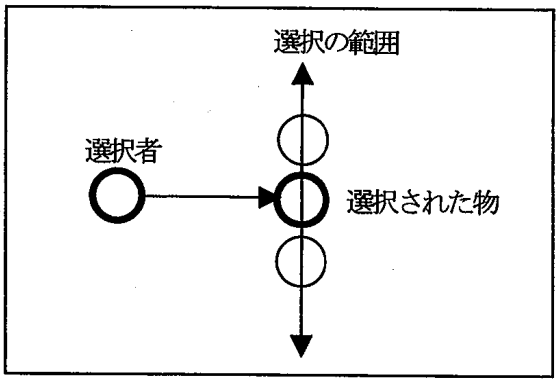


Figure 2

そしてこの図2で示される行為全体をベースとして何が目立って認識されるかで色々な概念を取り出すことができます。その具体的な例を少し簡約化して図示すると次頁のようになります。図3(a) は全体からその行為者という概念を取り出したものです。また、choice は「選択されたもの」と「選択という行為全体を名詞化したもの」という2つの意味がありますが、これらもやはりベー

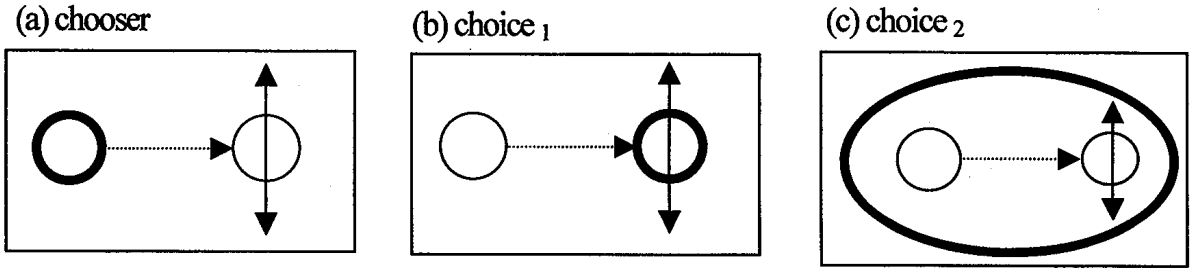


Figure 3

スは同じでどの部分を取り出すかという違いであると言えます。

また、ある物がその形や機能あるいはそれに関わる典型的な行為を表すことがあります。

(5) a. John forked some bacon onto a piece of bread.
b. Bill forked his fingers.

(6) a. John faxed Bill the document.
b. Mary e-mailed Jane the news.

(5 a-b) の *fork* は本来的には名詞ですが、(5 a) ではそれを使った典型的は行為として *fork* が動詞として使われています。また、(5 b) では *fork* の形のイメージからそれを動作として使っています。更に、(6 a-b) の *fax* は機械ですし *e-mail* はコンピューターでやり取りする手紙ですが、それが喚起する行為として「～をファックスで送る」「～を電子メールで送る」という行為を表しています。

更に付け加えれば、話者の出来事の想起の仕方も言語化に反映されます。

(7) a. Your camera is upstairs, in the bedroom, in the closet, on the top shelf.
b. Your camera is on the top shelf, in the closet, in the bedroom, upstairs.

(7 a-b) ではカメラの置いてある場所の説明であり結局は同じことを言っていますが、それをどのように伝えるかという点で異なっています。これは話者がその場面をどのように認識しているかということであり、認識（想起）の順に言語化しているわけです。

以上、間単にですが認知文法の言語観について述べました。言語表現としての構文や時制や冠詞の使い方などの文法的な要素というのは人間が出来事をどのように捉えそれをどのように聞き手に伝えようとしているのかという豊かな認識の世界を私達に教えてくれます。言い換えると、文法とは母国語話者の出来事の認識の仕方が言語表現として慣習化したものだと言うことができます。以下では、中学校や高等学校で扱われる文法事項を取り上げ、それぞれが英語を話す人達のどのような認識（出来事の捉え方）を反映しているのかについて述べたいと思います。

3．助動詞の使い方と話者の意図

そこで、議論の出発点として助動詞の使い方について考察し、その選択そのものに話者の出来事解釈が反映されていることをみます。

助動詞はよく知られているように「根源的意味（root meaning)」「認識的意味（epistemic meaning)」の二つの意味があります。歴史的には本動詞から根源的意味の助動詞が発達し、その根源的意味から認識的意味が発達したのですが、ここでは認識的意味から述べたいと思います。

認識的意味とは「話者の記述対象である出来事に対する蓋然性の査定」を表すということです。次の例文を観察してみましょう。

(8) a. Mr. Brown <u>has worked</u> at night.

b. I often see Mr. Brown coming home in the early morning.
He <u>must (may, might) work</u> at night.

(8 a) は現実の出来事を述べていますが、(8 b) では最初の文で述べられている事実から推察して「彼が夜勤をしている」という出来事の事実性に対する話者の確信の度合いを表しています。つまり、ここに話者の主観的な出来事解釈が現れているということです。この確信の度合いは次のようなスケールで表すことができます。

〈Degrees of conviction〉

high		〈alternatives〉
↑	must	certainly, undoubtedly
	should	probably, presumably
	can	maybe
	could	perhaps
	may	possibly
↓	might	
low		

では次に根源的意味について見てみましょう。根源的意味が「出来事に対する義務、許可、忠告・助言」などを表すものであることはよく知られています。ここで重要なことはそれぞれの意味を表すために 2 つの助動詞があり、そこには話者の出来事に対する解釈が反映されているということです。結論的には、義務は must と have to、許可は may と can、忠告・助言は should と ought to でそれぞれ表すことができますが、それぞれは次の表に示されるように大きく 2 つのタイプに区別することができます。

Table 1

	話者の主観的な判断	規則や状況からの客観的判断
義務	must	have to
許可	may	can
忠告・助言	should	ought to

(9) a. You must come back by 7:30 p.m.

b. You have to come back by 7:30 p.m. Dr. Johnson is visiting us at 8:00 p.m.

(10) a. You may leave the office when you finish your job.

b. You can get married in Britain when you are 16.

(11) a. You should lock the door before you go out.

b. You ought to contact the security desk before you leave the office.

つまり、話者が個人的な判断で言うときには must、may、should を使い、規則や状況から客観的に判断して言うときには have to、can、ought to を使うということです。具体的な言語使用を詳しく観察してみると、客観的な状況を表している場合でも must などが使われていることもありますが、これは「規則や状況を踏まえて話者が積極的に自分の判断を加えている」からだと言えます。いずれにしても話者の出来の認識の仕方が助動詞の選択に反映されているわけで、この区別は次のような図で表すことができます。

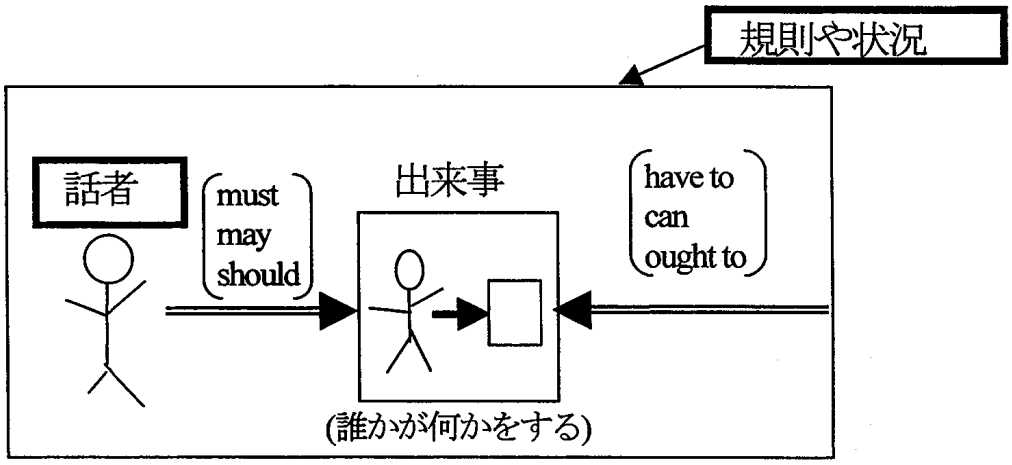


Figure 4

4．話者の出来事解釈と構文スキーマ

4.1．進行形

では次に、進行形が母国語話者のどのような認識を反映しているかを考えてみたいと思います。次の文を観察してみましょう。

(12) a. When I visited John, he was talking with someone on the phone.
b. Mary is living in New York.
c. I'm meeting Bill this afternoon.[1]
d. I'm hoping that you will join us.
e. I don't feel like going out this evening. I've been working in the garden all day.

(12 a) では話者はある時点（つまりジョンを訪問した時点）での進行中の出来事を表しています。また、(12 b) では話者は「メアリーがニューヨークに住んでいる」という出来事を一時的なものとして認識し、表現しています。このことは Mary lives in New York. という表現と比較してみるとよく分かります。

---

[1] このことに関係することとして、次の各文は『今日の午後 Bill に会う』という点では同じ意味を表していますが、発話の状況はかなり異なっています。
(i) a. I will meet Bill this afternoon.
b. I'm going to meet Bill this afternoon.
c. I meet Bill this afternoon.
d. I'm meeting Bill this afternoon.
(ia)、(ib) が Please give him some advice. と言われたことに対する返事だとすると (ia) は言われたことに対する反応としての意志であり、(ib) は言われる前からそうしようと考えていたことを表しています。また、(ic) は主語の意志ではなくスケジュールでそうなっていることを表し、(id) は未来の予定で彼とも連絡が取れているような場合です。この点で (ib) では Bill と連絡が取れていなくてもかまいません。

次の（12 c）では「今後の予定」、また、（12 d）では丁寧表現として進行形が用いられています。最後の（12 e）では話者は進行形を用いることで聞き手に臨場感（Mark Petersen 2002）を伝えようとしています。

さて、ここで重要なことは学習者に（12 a）から（12 e）の進行形の使い方を習得させることは確かに大切なことですが、それぞれの用法が互いに何の関係も無いかのように捉えさせてはいけないということです。少なくても授業者は進行形という表現形式そのものの意味を理解していなくてはならないと思います。このような認識の仕方は「桜」「杉」「松」「銀杏」がそれぞれ葉の形状など個別の特徴をもっていても、「木」として認識されることに似ています。つまり、私達はどういうものを「木」と呼ぶのかを知ってるからこそ、初めて「杉」を見たときにそれを「木の一種」として認識することができるのです。認知言語学では、このようなカテゴリー認識は細かな差異が捨象された幾分抽象的なイメージが私達の記憶の中にあり、それと照らし合わせることである特定のモノがどのカテゴリーに属するのかを判断すると考え、これをイメージスキーマと呼んでいます。

木のイメージスキーマ

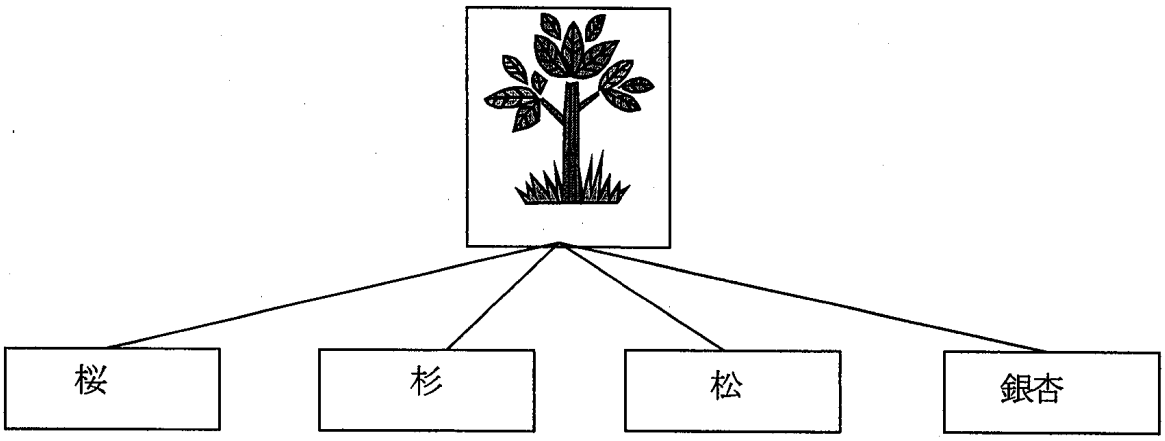


Figure 5

そこで、この視点から「進行形のイメージ」を考えてみたいと思いますが、この前提として次の動詞の 2 つのタイプを区別することが重要です。

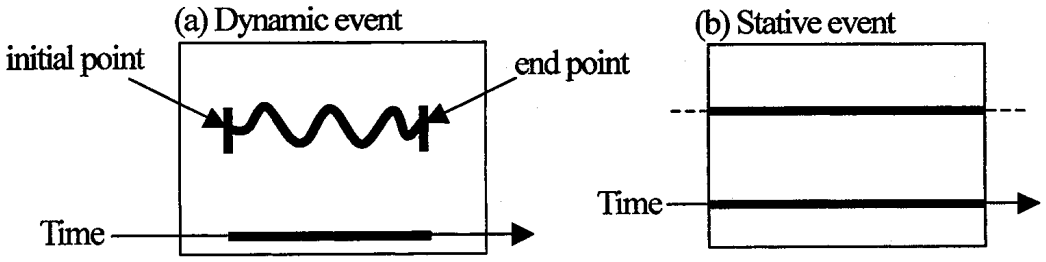


Figure 6

上の図は動詞で表される出来事が「動作性」と「状態性」に大きく分けられることを表したものです。「動作性」を表す動詞は始まり（initial point）と終わり（end point）をもち、動的な出来事を表し、その一部分を切り取って見た時にその動作としては認識でき難いという特徴をもっています。それに対して「状態性」を表す動詞は始まりと終わりが意識されず、静的な出来事を表します。このタイプは「動き」として認識されませんからその一部分を切り取って見た時でも、その出来事として認識することが可能です。この２つのタイプについては英語教育でも扱われますが、ここで注意が必要なことは、この区別によって動詞が２つのタイプに分けられるということではないということです。先に「言語表現が人間の出来事の解釈の仕方を反映している」と述べましたが、このことは当然出来事の「動作性」「状態性」の区別にも当てはまります。つまり、私達が出来事をどのように認識しているかということが大切なのです。

このことは次のような身近な例で確認することができます。

(13) a. The castle stands on the hill.
b. *The castle is standing on the hill.
c. John is standing on the hill.

ここで（13 b）が容認されないのは「その城は丘の上に立っている」という出来事では終わりをイメージすることができ難いからです。つまり、この出来事は図６（b）のように認識されているため進行形にすると変な感じになってしまう

のです。それに対して (13 c) の主語 (*John*) は人間ですから自分の意志で動くことができ、この出来事の終わりをイメージすることができます。

そこで以上のことを踏まえて「進行形のイメージスキーマ」を図示してみますと以下のようになります。

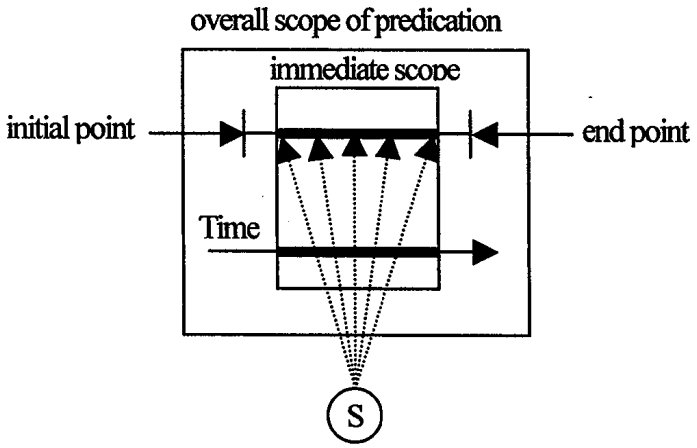


Figure 7

つまり、進行形とは「話者が始まりと終わりのある出来事の内側に意識を向けたときの表現形式」ということができます。[2]

さて、それではこの視点から先の (12 a-e) について分析し、どのようにして図 7 のイメージから 5 つの意味がでてくるのかを考えてみたいと思います。そこでまず (12 a) についてですが、これについてはあまり説明の必要がないかと思います。ここでは私がジョンの家を訪問した時にジョンが何をしていたかを表現していますが、ジョンが電話をかけるという行為をしたのは私が訪問する前であり、訪問したときは電話中ですが、それは終わりのある出来事だということです。ですからこの出来事は図 7 のイメージと一致しています。また、(12 b) もメアリーが仕事か何かで今ニューヨークにいるわけですが、話者はこの出

[2] 認知文法では認識される範囲全体を overall scope、その中で特に意識が向けられている部分を immediate scope と呼びます。ここでは immediate scope が進行形によって表される部分ということです。

来事を終わりのあるものとして認識しています。従ってこの場合もやはり図7のイメージと一致しています。では次の(12 c)はどうでしょうか？　ここで大切なことは動詞の性質です。meet、arrive、dieなどの動詞は到達動詞(achievement verbs）と呼ばれています。つまり、出来事の到達点を表すということです。ですからこのような動詞の場合には図7の終わりの点(end point)をmeet、arrive、dieする点と考えると進行形はその前に意識を向けた表現ということになります。進行形が「今後の予定」を表すのはこのような認識に起因しています。また、(12 d)のように進行形が丁寧な表現となるのも動詞の性質が関わっています。hope、think、wonderなど気持ちを表す動詞の場合にこのような意味を表すことができるのですが、これは進行形が「一時的な読み」をもつことから説明できます。つまり、「ちょっと考えている」ということでこのことが聞き手に対する押し付けがましさを避けることができ、それだけ丁寧な感じになるのです。最後に(12 e)の例ですかが、このような臨場感も図7のイメージから説明することができます。つまり、進行形が出来事の内側に意識を向けた表現だとすると、その記述力が聞き手に臨場感を伝える効果をもつということができます。

そしてこのように考えると英語の母国語話者がある出来事を進行形を用いて表現するときにはある一定のイメージがあり、そこから図8に示される個々の具体的な意味がでてくるのだと言えます。

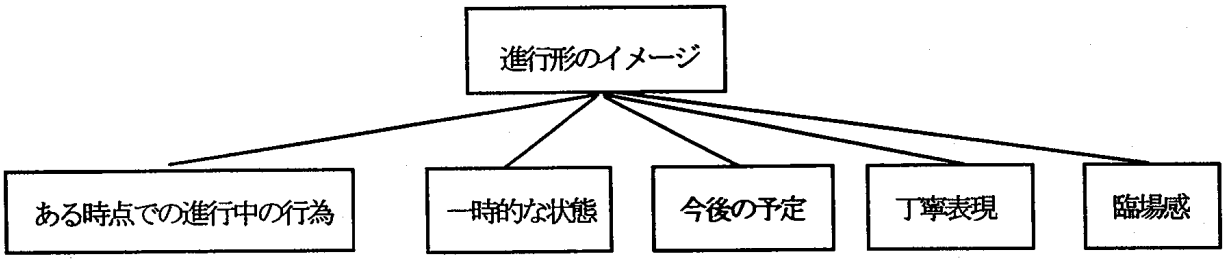


Figure 8

4.2. HAVE-構文

この節ではHAVE-構文について考えてみたいと思います。伝統的な文法では次の(14)の3つの文はそれぞれ「所有の 'have'」、「使役・受益・被害の 'have'」「完了の助動詞の 'have'」と個別的な事項として学習するのが一般的です。

(14) a. Bill has a car.
b. Bill has a mechanic repair the car.
c. Bill has repaired the car.

では、それぞれの 'have' は何の関係もないのでしょうか？　結論から言えば、これは正しい捉え方ではありません。以下ではこの問題を考え、すべての 'have' に共通するスキーマからそれぞれの使い方が説明できることを述べたいと思います。

そこで、まず初めに、(14 a) と (14 b) について考えてみますと両者は「文主語の経験領域に何かがある」という点で共通していることが分かります。違いは (14 a) では「モノ (thing) がある」のに対して (14 b) では「出来事 (event) がある」ということだけです。これを図で示すと以下のように表すことができます。

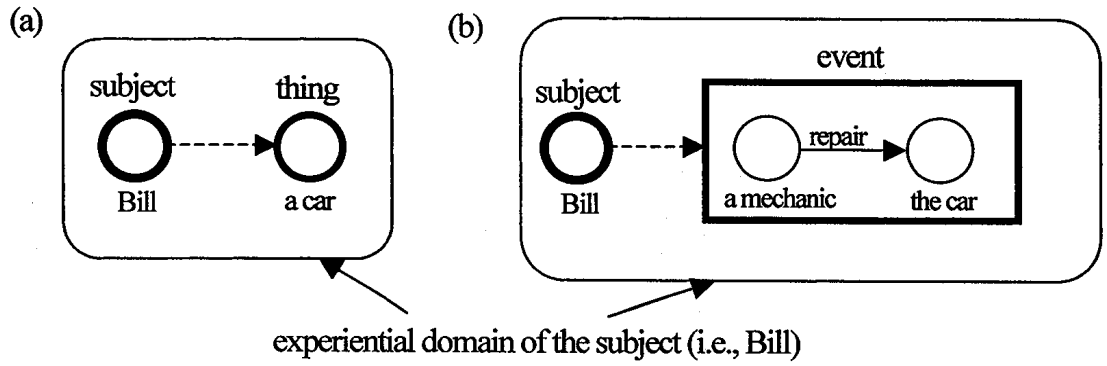


Figure 9

このように「使役・受益・被害の 'have'」を考える利点の1つは、この構文の

表す３つの意味を個別的にではなく、あくまでもイメージは１つであり、それぞれの意味が「発話の場面や状況と文主語の意味的役割（semantic roles）との関係」で理解されるものであることが自然に説明できるということです。つまり、この構文は「文主語が経験領域に出来事をもっている」ということを表すだけで「～させる」「～してもらう」「～される」という意味は状況によって解釈されるということです。このことは次の例からも明らかです。

(15) a. Then we had a burial party of Jews bury the bodies.（使役）
b. Bill had a man rob him last night.（被害）

(15 a) は想起される状況から「使役」の読みをもち、(15 b) は「被害」の読みをもつと解釈するのが普通ですが、たとえば、(15 b) が詐欺行為として意図的にある男に自分を襲わせたという状況であれば、「使役」の読みも可能です。

そして、この同じ原理は (14 c) の現在完了にも当てはまります。だた、違いは文主語ではなく、「話者が自分の経験領域に出来事をもっている」という点です。次の例を観察して見て下さい。

(16) a. Please excuse my dirty clothes. I've worked in the garden.
b. I have to use the stairs. The lift has broken down.
c. Two prisoners have escaped from Dartmoor. They used a ladder which had been left behind by some workmen, climbed a twenty-foot wall and got away in a stolen car.
d. We have waited all day. (We are still waiting.)

上のデータから言えることは、(16 a-b) では話者は現在の状況を説明するために過去に起こった出来事に言及したり、(16 c) のように過去に起こった出来事を話題（topic）として現在の談話空間（current discourse space）に持ち込んだり、また、(16 d) のように過去に始まり現在に至る状況を述べたりするため

に現在完了を使うということです。つまり、どの場合にも共通していることは現在完了という表現形式はその出来事が話者の経験領域（あるいは現在の談話空間）に存在するということによって動機付けられるということです。そしてここで重要なことはこのような出来事の認識の仕方からその出来事自体は過去でもそれが現在の談話空間に持ち込まれることで「過去の特定の時」という認識が薄れるということです。現在完了が特定の過去時を示す副詞句と共起できないのはこのような認識に起因すると言えます。

また、この現在完了の性質についてもう少し付け加えて言えば、この表現形式は「過去に起こった出来事が現在（発話時）にも有効であるという話者の認識」に基づくものであると言えます。これは過去に起こった出来事の写真を今見ているという状況を思い浮かべると分かりやすいと思いますが、過去に起こった出来事というのは固定され変化しないわけですから、それはいわばいつでも取り出せるということであり、'have' という語によって喚起される「現在の談話空間（current discourse space）」にそれを投射したものが現在完了と呼ばれるものの本質だということになります。そこで、過去時制の表現と現在完了の表現での話者の認識の違いを図示すると図 10 のようになります。

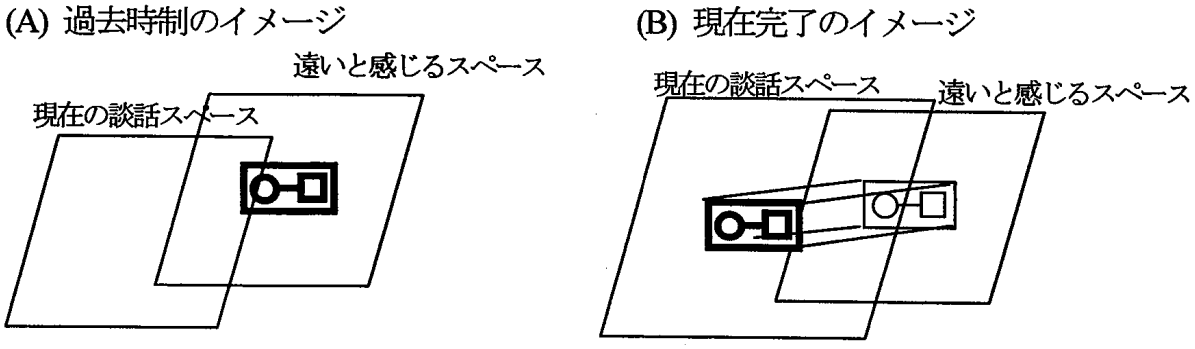


Figure 10

次節で詳しく述べますが、過去時制は話者が出来事を遠いものとして認識していることを表す言語手段であり、現在完了は元々は遠くに認識される出来事を発話状況上何らかの理由のために「近いと感じる空間」に投射する言語手段

だと言うことができます。[3]

そしてこのような認識は英語教育上も重要であると考えられます。それは現在完了の下位分類である「完了」「経験」「継続」「結果」という用法は上で述べたイメージから発話の状況によって理解されることで、文自体にそのような固定した意味があるのではないからです。

(17) a. I've been accepted for the master's program at Harvard University. (完了)
b. I've known the Smiths for long. (継続)
c. I have eaten lobster, but I can't say I enjoyed it. (経験)
d. My father has traveled from Europe to Asia many times. (経験)

(17 a-d) は一般的な解釈としては括弧で示される読みもつと言えますが、次の(18)はそうではありません。

(18) John has been in Boston since 1971. (継続 or 経験)

この文は「ジョンは 1971 年以来ずっとボストンに住んでいる。」と「継続」としての解釈と「ジョンは 1971 年から何度かボストンにいたことがある。」という「経験」としての解釈も可能であり、そのどちらの読みをもつかは発話の場面から語用論的に理解されることになります。また、(19)に示されるように *I have smoked cigarettes* までは同じでも、その後に付加された情報によって解

[3] このような認識のために話者がその出来事を何らかの点で遠いと感じる場合には現在完了は使われないということが自然に説明できます。
(i) a. *Queen Victoria has visited Brighton.
b. *John visited the park two days ago.
つまり、すでに故人となっている人や明確な過去を示す表現があるといわばその認知空間に意識が向いてしまいますから、どうしてもそれは遠い出来事という認識が働いてしまうのです。

釈が決定される場合もあります。

(19) a. I have smoked cigarettes before, but not today. (経験)
b. I have smoked cigarettes since I graduated from university. (継続)

このように考えてくると、この表現形式の使用条件は発話時における「出来事の有効性」だけであり、話者はその不定の過去に端を発する出来事を話題(topic)として選択し、発話を構成しようとする場合にそれを現在完了という形式で「発話時の概念空間」上に概念化するということにすぎないと言うことです。そしてそれが発話の状況における語用論的要因によって一定の解釈を受けるということなのです。

更にこのことは「状態を表す出来事」のときにはより明確になります。つまり、先ほど図6 (b) に示しましたように、終わりを認識していない出来事の場合にはそれを「現在の認識空間」で認識しても同様に始まりと終わりは認識されないわけですから、そこから当然「継続」としての読みが出てくるわけです。

5. 空間認識と言語表現

認知文法の基本的な考え方は最初に述べたように「言語表現は話者が出来事をどのように認識しているかを反映している」というものです。前節の過去形と現在完了という2つの表現の違いは話者が出来事をどのように認識しているのか、また、出来事をどのようなものとして伝えているのかを反映していると言えます。この2つの言語手段を区別している認識の違いとして「近い／遠いという認識空間」について述べましたが、以下ではこの点についてもう少し詳しく見てみたいと思います。

そこで、ここではまず初めに、'this' と 'that' をイメージ化することから始めてみます。

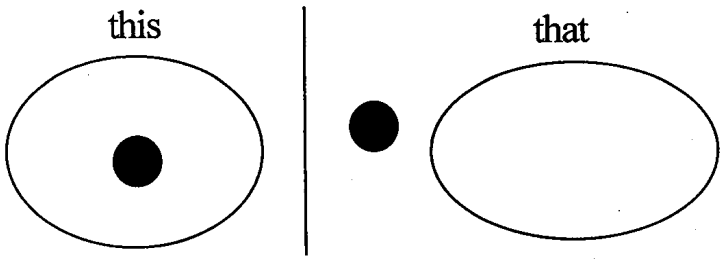


Figure 11

'this' は話者が「近くに認識しているもの」を表し、'that' は「遠くに認識しているもの」を表すと一般的に言えると思いますが、この2つの区別には何となくそれを「近くに感じる領域」というものの心的存在があるように思われます。上の図はこの違いをイメージ化して表したものです。ここではこの領域を支配領域（dominion）と呼びます。以下ではこのイメージが英語の仕組みとどのように関わっているのかを「現在時制と過去時制」「不定詞と動名詞」を例にして述べたいと思います。

5.1. 現在時制と過去時制

ではまず初めに、現在形と過去形について考えてみたいと思います。

(20) a. John <u>is</u> a student at this university.
　　 b. John <u>graduated</u> in German at this university last year.

(20 a) は話者が出来事を「近いもの」として認識していることを表しています。ですからその出来事は話者の現在の現実の中にあると言えます。それに対して (20 b) は話者が出来事を過去のこととして「遠いもの」と認識していることを表しています。しかし、現在形・過去形が常にこのように現実世界の「時」と対応するとは限らないことはよく知られています。

そこで、次の文を観察してみましょう。

(21) In November 1857, Charles Darwin's *The Origin of Species*, one of the greatest and most controversial works in the literature of science, was published in London. The central idea in this book is the principle of natural selection.

(22) a. My ex-wife was Mexican. I don't know where she lives now.

b. If Bill took a taxi, he would have a better chance of getting there in time.

c. I wanted to ask you something.

(21)では最初の文は過去形で表現されていますが、2番目の文は現在形で表現されています。これは話者が2番目の文の内容を現在も成り立つこととして「近いもの」と認識していることを反映していると言えます。それに対して、(22 a-c)では話者が出来事を何らかの点で遠いこととして認識していることを表しています。具体的に言えば、(22 a)では話者が別れた妻を心理的に遠いものと認識していることを、(22 b) では話者が「*Bill* がタクシーに乗る」という出来事の実現可能性を遠い(低い)ものと認識していることを、そして、(22 c)のように*want*、*hope* などの願望を表す動詞の過去形では話者が相手(*you*)と心理的距離を置いていることを表わし、そのため丁寧な表現として理解されます。従って、このように考えると (22 b) のような文を「仮定法」として個別に扱う必要はなく、すべて「過去形のもつ一定のイメージ」から説明することができます。以上のことから過去形のイメージスキーマは次のようなものであると考えられます。

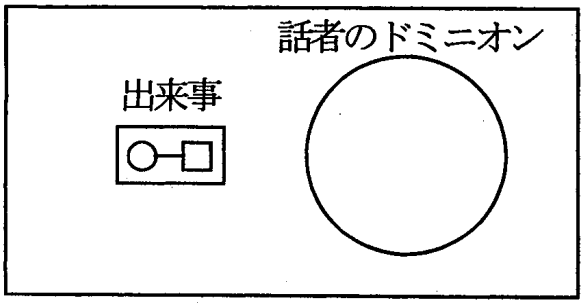


Figure 12

従って、この過去形のイメージスキーマが時間的に過去の出来事を表すのは図13に示されるように時間軸上にこのイメージが位置つけられる場合に過ぎないということになります。

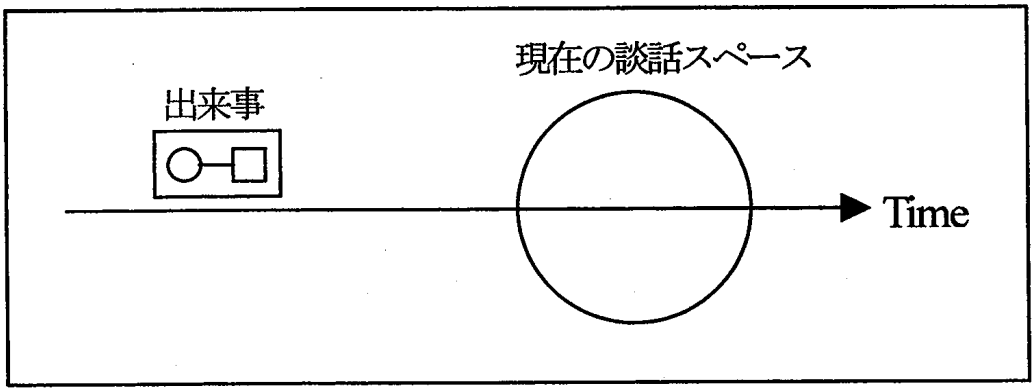


Figure 13

そして更に言えば、図12がなぜ（22 b）のような否定的な意味につながるのかは以下の例から考えると自然に説明ができます。

(23) a. That is outside my field.
b. The lecture is beyond my comprehension.
c. His remark is beyond my endurance.

(23 a-c) では *outside*、*beyond* という表現が用いられていますが、これはまさに図12のように何かが領域の外にあることを表しています。そして、それぞれが「それは私の専門ではない。」「その講義は私の理解を超えている（理解できない）。」「彼の言葉は私の我慢を超えている（我慢できない）。」と否定の解釈をもちます。つまり、何かが領域の外にあるという認識は確かに否定の概念と結び付いているのです。

従ってこのように考えてくると、学校文法では(24)の「条件文」と(25)のような「仮定法」を区別して扱うのが一般的ですが、このことは母国語話者の言語直感

と必ずしも一致していないように思えてきます。

(24) a. A: I hear that your secretary's going to have a baby.
B: Yes. It's nice for her, but if she's going to have a baby, I will have to do all the paperwork myself.
b. If it rains tomorrow, we may have to cancel the trip.
c. If you park your car here, it may be damaged by those children.

(25) a. If I came into a fortune, I would give up working.
b. If I knew the answer to that question, I would tell you.
c. If I had a computer, I could get on with my work much more quickly.

(24 a-c) では *If* によって開かれる仮想の世界（心的空間（mental space））で条件文に示される出来事が起これば、その帰結として主節の出来事が起こるだろうと述べています。ですからこの場合には「そのようなことは起こらないだろう」という考えは話者にはありません。つまり、「条件文」と「仮定法」の違いは話者が出来事を否定的に捉えているかどうかでしかないのです。

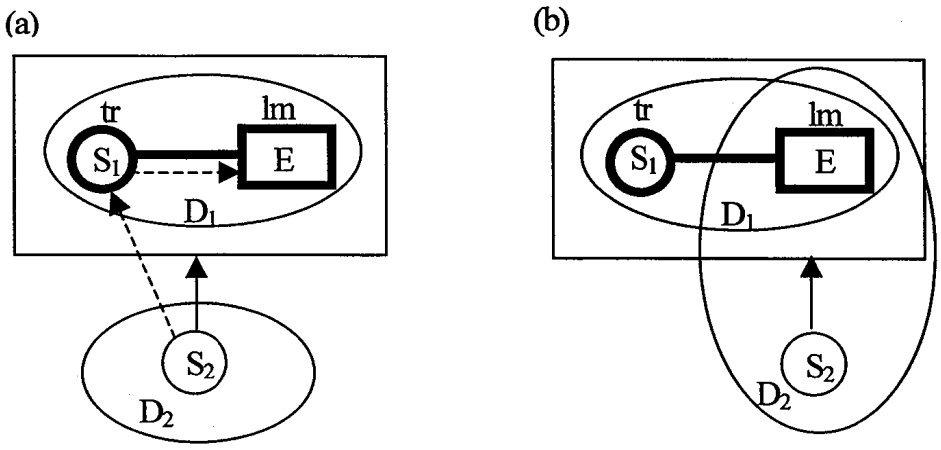
そして、このように遠近概念が現在形・過去形の区別に確かに関わっていることは次のような「時制の一致（sequence of tenses）」の例を見てもうなずけます。

(26) a. Mary is pregnant.
b. John said that Mary <u>was</u> pregnant.
c. John said that Mary <u>is</u> pregnant.

(27) a. Bill said that John <u>loves</u> Mary.
b. Sally told me that John <u>is</u> very depressed.

(26 a) の文を文の一部とした (26 b)、(26 c) を見ると前者では過去時制、後者

では現在時制になっています。これはどちらが間違いというのではありません。このことは(27 a-b)でも同様です。これは話者が目的語節の出来事をどのように解釈しているかという違いによると考えることができます。具体的には（26 b）は話者が目的語節の出来事を文主語である *John* の視点から捉えている表現であると言えます。そのため *John* が言った時点での出来事として解釈されます。それに対して(26 c)は話者が自分の認識領域内にあるものとして出来事を捉えていることを示しています。この認識の違いは図14(a-b)のように示すことができます。



S_1: 主節の主語、　D_1: 主節の主語の認知領域（支配領域）
S_2: 話者、　D_2: 話者の認知領域（支配領域）
E: that-節のイベント
----▶: 話者がthat-節イベントを認識する経路
——▶: 出来事全体に対する話者の認識

Figure 14

そして更に言えば、(26 c)のように目的語節が時制の一致を受けずに現在形となっているということはその出来事を前景化して捉えているということで、このことが「その出来事が発話時も成り立つ」という認識に結び付くということができます。これは(27 a-b)についても同様です。そしてこのような認識から（26 c)、(27 a-b）の文はそれぞれ *Mary is pregnant, John loves Mary, John is very depressed* についての文として理解されます。それに対して、(26 b）の

ように「時制の一致」生じている文の場合には *John* についての文であり彼が何を言ったかということを述べた文として理解されます。[4]

5.2. ドメインと表現の意味

では次に過去形という表現形式がどうして現実世界の時だけではなく、上で述べたような時間とは無関係ないくつかの意味をもち得るのかを考えてみたいと思います。

そこで重要なのがドメインという概念です。認知言語学では言語表現の意味はいくつかのドメインの集合体によって形成されていると考えます。たとえば、コーヒーカップを例に考えてみると、それは一定の重さがあり、一定の形をしていて、一定の機能・用途があります。このとき「重さ」「形」「機能・用途」をそれぞれ「重さのドメイン」「形のドメイン」「機能・用途のドメイン」といいます。

では、このドメインという概念の理解を深めるために「写真」を例に考えてみましょう。

(28) a. The photograph is torn.
b. The photograph is out of focus.
c. The photograph was awarded a prize.

(Taylor 2002: 442)

物体は今述べたように色々な概念の複合体ですから、文の意味からそのうちの

---

[4] ここで注意が必要なことは、think などの思考動詞では義務的に「時制の一致」が起こるということです。

(i) a. John thought that Bill loved Mary.
b. *John thought that Bill loves Mary.

これはこの種の動詞が文主語の思考内容を表すものなので、目的語節の内容はそれを思考している間のみ有効だということになります。ですから、このような場合話者は目的語節の内容を文主語の視点から見ることしかできないのです。

どの概念が目立って認識されているかということが分かります。(28 a) では材質、つまり、紙という概念が前景化されています。また、写真というのは何かと写したものですから、当然その写り具合いが問題となり得ます。(28 b) ではその写り具合が前景化されています。更に、写真は審美的な価値という側面ももちます。(28 c) はその審美的な概念が前景化しています。このように物体は図 15 のように色々な概念が係って意味を構成しています。そして、そのそれぞれを認知言語学ではドメインと呼びますが、ここで重要なことは、あるドメインが前景化されると相対的に他のドメインが背景化するということです。

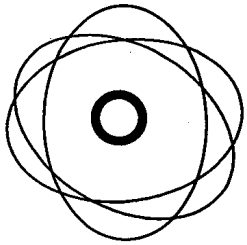


Figure 15

そこで、この視点から現在形・過去形という英語の時制に関わっているドメインを考えてみると以下の 3 つのドメインを挙げることができます。

(29) a. 時のドメイン
b. 対人関係のドメイン
c. 仮想世界のドメイン

この(29)のドメインという概念からなぜ過去形が複数の意味を表すのかを考えてみると、「現実世界の過去時」を表していると解釈されるのは「時のドメイン」が前景化されそのドメイン上に図 12 のイメージスキーマが概念化されるからであり、「人との心的な距離」や「丁寧表現」として解釈されるのは「対人関係ドメイン」が前景化することでそのドメイン上にイメージスキーマが概念化されるからであり、また、過去形が If-節で用いられることで話者の否定的な態度

を表すのはIf-節によって喚起される「仮想世界のドメイン」上にイメージスキーマが概念化されるからだと言うことができます。

5.3. 不定詞と動名詞

これまで『空間のイメージ』を利用して表現の意味が区別されていることを英語の時制を例に述べてきました。この節ではこのことが不定詞と動名詞の特徴付けにも当てはまることを述べたいと思います。そして、以下では『不定詞』が「近くにある出来事」を表し、『動名詞』は「遠くにある出来事」を表すことを示したいと思います。

そこで、議論の出発点として少し抽象的な話ですが、「近い」・「遠い」ということから連想されるイメージを以下のように挙げ、このような認識によって作られる「近いと認識される領域」の中に出来事があるのか、それもと外にあるのかということが「不定詞」と「動名詞」の使い分けに関わっていることを述べたいと思います。

『近い』ということから連想されるイメージ：

a. モノや出来事が自分のコントロールできる範囲にある

b. モノや出来事に自分が関与している（関係がある）

c. モノや出来事が自分に身近なことを表している

『遠い』ということから連想されるイメージ

a. モノや出来事が自分のコントロールできる範囲の外にある

b. モノや出来事に自分が関わっていない（関係が無い）

c. モノや出来事が自分にとって身近なことでない（むしろ、一般的なこと）

ではこのことを踏まえて次の文を観察してみましょう。

(30) a. Bill agreed <u>to come</u> with us.

b. I regret <u>telling</u> you that story.

c. Mary recommended buying the book.

(30 a) では *to come with us* という出来事はまだ起こっていません。つまり、*Bill* はこの出来事の実現可能性をコントロールできるので不定詞で表現されているのです。(30 b) では *telling you that story* はすでに実行されたことなので、*I* はその実現可能性をコントロールできません。そのために動名詞で表現されています。(30 c) は *buying the book* はまだ起こっていない出来事ですが、買うのは *Mary* ではなく、*Mary* と話をしている相手です。従って、*Mary* はその出来事の実現可能性をコントロールできないので動名詞で表現されるのです。

このことは不定詞や動名詞が文の主語になっている場合にも当てはまります。

(31) a. To learn foreign languages is important for getting a better job.
b. Learning foreign languages is important for getting a better job.

(31 a) では話者は特定の人を想起し、個別的なこととして「外国語を学ぶことの重要性」について話しています。それに対して (31 b) は特定の誰かにではなく一般的に「外国語を学ぶことの重要性」について話しているということになります。

ここで次のことに注意しておきましょう。

(32) a. *To lose his fortune drove him mad.
b. Losing his fortune drove him mad.
(33) a. It would be nice to drive a car along this beach.
b. *It would be nice driving a car along this beach.

今述べましたように不定詞は文主語（または話者）が出来事を身近かなこと

と認識していることを表します（例えば未完了の出来事はその実行可能性を自分の意志で決定できます）。それに対して、動名詞は文主語（または話者）が自分の意志でコントロールできない（例えば、すでに完了した過去の出来事や出来事の行為者が自分ではない）ことを表します。従って、このことから（32 a）のように不定詞が過去時制と共に用いられないことや、（33 b）のように動名詞が仮想の話しの場合には用いられないことを自然に説明することができます。このような出来事認識の違いは次のように図示することができます。

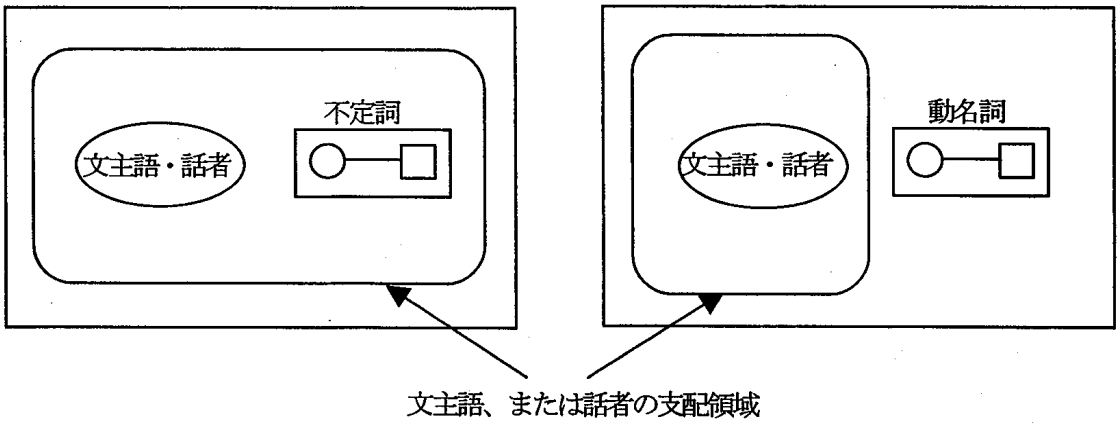


Figure 16

6．能動文と受動文

能動文と受動文の違いも明確に話者が出来事をどのように捉えているか、あるいはどのように出来事を伝えようとしているかを反映しています。そこでまず初めに理解しておかなくてはいけないことは英語では受動文は何か特別な理由・動機付けがなければ使われないということです。これは英語を話す人達の基本的な出来事の認識の仕方が「A が B する」ということであることに起因しています。そこでこのような認識の仕方を少し抽象化してイメージで示すと図 17 のようになります。つまり、英語を話す人達が図 17 のような出来事を見たときには動作をしている人の方に意識を向けやすいということです。ですから、

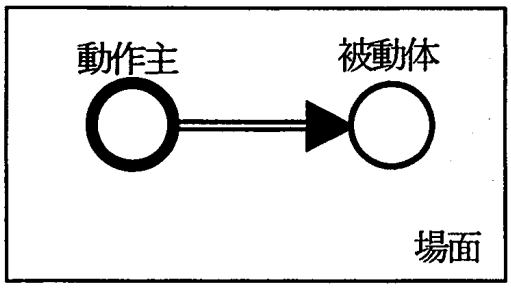


Figure 17

出来事をいきなり受動文で表現されると状況を把握するのに時間がかかると言われています。では受動文の表現というのはどのようなメカニズムによって使用されるのでしょうか。結論から先に言えば、受動文というのは「動作主をデフォーカスしたときの表現形式」ということです。このことは受動文の約 80% では by～という表現がないことからもうなずけます。

そこで、この「動作主をデフォーカスする」という認識過程からくる受動文の表現効果について簡単に述べておくと次のようになります。

①受動文は誰（何）について語っているかという視点を一定に保つ
②言いたいことを一般的なこととして伝える
③丁寧な表現として伝える

(34) a. The movie star appeared in the lounge and <u>many journalists surrounded him</u>.
b. <u>I believe</u> that John is the best candidate for that job.
c. <u>We request you</u> to submit the document no later than September 21.

(35) a. The movie star appeared in the lounge and <u>he was surrounded by many journalists</u>.
b. <u>It is believed</u> that John is the best candidate for that job.
c. <u>You are requested to</u> submit the document no later than September 21.

そこでまず、①について考えてみると、文の主語は「何について（あるいは誰について）」話しているのかを示す部分です。ですから（34 a）では文の最初で *the movie star* について話をしておいて *and* 以下で今度は *many journalists* について話していることになりますから、これを映画の１シーンに例えて考えてみるとカメラが大きく振れてしまい場面や状況を把握し難くなってしまいます。そこでこのようなことを避けるためには、誰について話しているのかを一定に保つ方が場面を理解しやすく、そのために（35 a）のような受動文が使われるわけです。

このようなことは日常的によくあることで、次の㊱で *and* 以下が *the New York Herald, published by James Gordon Bennett, followed it.* となっていないのはこの文が *the New York Sun* について述べた文だからです。また、先ほど英語の受動文の 80%が by～がないと述べましたが、ここで *by the New York Herald* が言語化されているのは文全体の趣旨から *the New York Sun* と *the New York Herald* の対比を明確にするためです。つまり、㊱の文では「主語の一貫性」と「対比による文意の明確化」という２つの効果が受動文によって果たされていると言えます。

㊱ The *New York Sun*, founded in 1833, was the first successful penny paper, and <u>it was followed by the *New York Herald*</u>, published by James Gordon Bennett.

次に②についてですが、同様の視点から（35 b）について考えて考えてみると、*believe* や *say* などの動詞の場合には誰が *believe* あるいは *say* しているかを述べていない分それだけ一般的にそう思われているという解釈になります。

最後に③についてですが、*request* などの要求を表す動詞の場合には誰が *request* しているかを明確にしないことで状況や規則からそうすることが求められているという解釈になり、誰かによる直接的な指示というよりも丁寧な響きをもつと言うことができます。

7．第4文型と第3文型

では次に話者の出来事の認識の仕方の違いが表現の違いとなって現れるもう一つの例として第4文型（SVOO）とそれに対応する第3文型（SVO to/for 名詞）について考えてみたいと思います。

そこでまず初めに、第4文型の典型例（プロトタイプ）として図18のような「2人の人がいて物が1つある状況」を思い浮かべてみましょう。

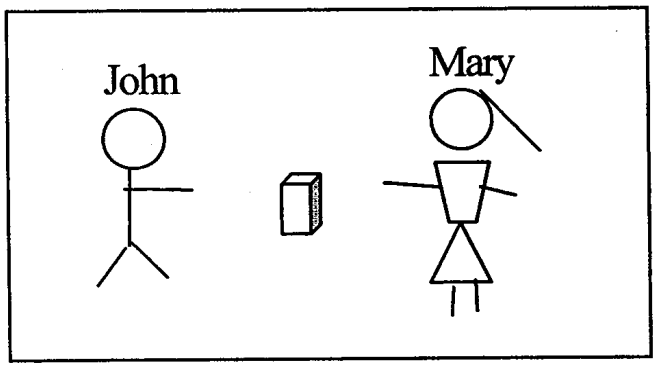


Figure 18

このような状況で起こり得る出来事を挙げてみると「与える」「送る」などが考えられますが、ここで重要なことはこのことを言葉にして表現する段階で次の2つの捉え方があるということです。

①人と人の関係で出来事を認識している
②人と物の関係で出来事を認識している

結論から言えば、話者が「人と人の関係に意識を向けている」ときにはSVOOという表現としてその出来事を伝え、「人（主語）と物の関係に意識が向いている」ときにはSVO to/for 名詞という表現でその出来事を表現すると考えられます。次の文を観察して見てください。

(37) a. John gave Mary a book.

b. John gave a book to Mary.

上の例文のそれぞれ問題になっている要素の距離がこのような話者の認識を反映しています。つまり、(37 a) では話者は「*John* と *Mary* の間で何が起こったのか」ということに関心があり、(37 b) では「*John* は *a book* をどうしたのか」ということに関心があるということです。このように (37 a-b) では出来事そのものは同じですが、それを話者がどのように捉えているかの違いが言語表現に反映されるわけです。

そして更に言えば、どちらかにしか認識し難い場合には SVOO と SVO to/for 名詞のどちらかでしか表現し難いということも当然あり得ます。次の文を見てみましょう。

(38) a. Mary gave John a kiss.

b. *Mary gave a kiss to John.

(39) a. Mary lent John a hand.

b. *Mary lent a hand to John.

(38)、(39)では *a kiss* や *a hand* は物ではなく「キス」「手助け」といった出来事を表しており、このような名詞を eventive noun と言います。このような場合には出来事を「人と人の関係」としか認識することができない（つまり、「人と物の関係」として認識できない）ので (38 b) や (39 b) のような言い方はできないわけです。

また、(40)から(42)の例文では SVOO という表現は容認されません。これは *suggest*、*explain*、*report* という行為が「何を」ということに意識を向けやすい性質をもつからです。確かに「誰に」ということはそれぞれの行為の一部として含意されていますが、(40 c)、(41 c)、(42 c) を見ると分かるように「誰に」の

部分は表現しないことも可能です。この事実はやはりこの種の出来事では「人（主語）と物の関係」に意識を向けやすいことを示しています。ですから「人と人の関係」に意識を向けた表現であるSVOOという表現形式をとり難いのです。

(40) a. The scientist suggested an important plan to the President.
b. *The scientist suggested the President an important plan.
c. The scientist suggested an important plan.

(41) a. John explained the problem to the children.
b. *John explained the children the problem.
c. John explained the problem.

(42) a. Bill reported the accident to the captain.
b. *Bill reported the captain the accident.
c. Bill reported the accident. (Konishi: 1980)

また、この図18のようなイメージとその表現形式の対応関係が慣習化し固定化してくると、元来は「人と物の関係」を表す(43)のような出来事でも、そこにもう1人登場し「2人の人と物の関係」となり、図18のイメージと一致すると(44)のようにSVOOという表現形式でその出来事を記述するとことができます。しかし、これは*give*のように本来的に「2人の人と物の関係」を表すのではありませんから、この種の出来事では「人と物の関係」に意識を向けた場合は(45)のようにSVO for 名詞という表現になります。

(43) a. Mary baked a cake.
b. John bought a new car.
c. Jane picked the dress she liked best.

(44) a. Mary knitted John a cardigan.
b. Jane roasted Jim a chicken.

c. Tom found Bill a taxi.

d. Chris got Jim a jacket.

(45) a. Mary knitted a cardigan for John.

b. Jane roasted a chicken for Jim.

c. Tom found a taxi for Bill.

d. Chris got a jacket for Jim.

更に、名詞が動詞として使用されるようになった(46)のような出来事も、その定義から「送り手と受け手という2人の人と送られる物」が存在しますから図18のイメージと一致し、(47)のように表現できるのです。

(46) a. telegraph (v): to send a message by telegraph

b. fax (v): to send someone a letter or message by fax machine

c. e-mail (v): to send a message by computer

d. wire (v): to send a TELEGRAM to someone.

(Longman English Dictionary)

(47) a. John telegraphed / faxed / e-mailed / wired Bill the news.

b. John telegraphed / faxed / e-mailed / wired the news to Bill.

最後に、図18のイメージとSVOOの対応関係が慣習化し固定化してくることで予測できることは、(48)、(49)のようにいわゆる無生物主語であっても認識のイメージが図18に似ていればSVOOという表現として記述できるということです。

(48) a. Mary's behavior gave John an idea.

b. *Mary's behavior gave an idea to John.

(49) a. The medicine lent John relief.

b. *The medicine lent relief to John.

ただ、このような場合には「移動の概念」というよりはむしろ、「ある刺激によって人がある考えをもつ、ある状態になる」ということですから、「移動」という概念を前景化したSVO＋to名詞という表現形式でその出来事を記述することはできません。

8．冠詞と指示対象の認識

8.1．定冠詞

次に英語のネイティブ・スピーカーがどのようなときにtheを使うのかを考えてみると、それは次のように図示することができます。

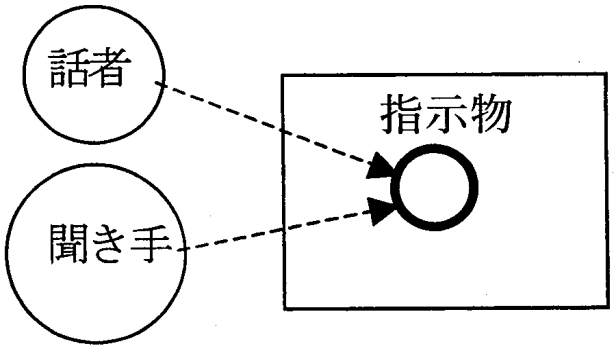


Figure 19

このように話し手は聞き手が自分と同じ指示物を同定できる、つまり聞き手が何(どれ)を指しているか理解できると判断したときにその名詞にtheを付けて表現します。

ではこのことを踏まえて具体的なtheの使い方を見ておきましょう。

(50) a. I bought <u>a book</u> yesterday. I found <u>the book</u> interesting to me.（前方照応の *the*）

b. <u>The apartment house</u> that John lives in is thirty stories high.（後方照応の *the*）

c. Please shut the door. (外界照応の *the*)

d. Bill caught me by the arm. (部分の *the*)

e. I got on a bus yesterday and the driver was drunk. (間接照応の *the*)

f. I bought a used car the other day, but the tires were little too old. (間接照応の *the*)

(50 a) では聞き手が *the book* が話者 (I) が昨日買った本のことを言っていることが理解できるので the を用いていており、(50 b) では関係詞節の説明で *John* が住んでいるアパートに限定されることでどのアパートを指しているか理解できるので the を用いています。また、(50 c) では発話の場面から聞き手がどの *door* を指しているか理解できるので the を用いています。そして (50 d) では文の意味から *me* の腕を指していると理解できるので the を用いており、(50 e) と (50 f) では *a bus* や *a used car* からの連想によってそのバスの *driver*、また、その車のタイヤだと理解できるので the を用いています。

ここで重要なことは、その名詞を the を用いて表現するかどうかを判断するのは話者だということです。つまり、話者がその状況をどのように解釈しているかが the の有無につながるということです。よく小説などで読者にその指示物が確定していなくても the 名詞という表現が出てくることがありますが、これは (50 c) の使い方に少し似ていますが、言わば小説の場面に読者を引き込むための手法であり、それによって読者はあたかも作中場面にいるかのようにストーリーを読み進めていくわけです。

8.2. ゼロ冠詞と不定冠詞

では次に不定冠詞がつく場合と何もつかないゼロ冠詞の違いについて考えてみます。そこでまず初めに、次の 2 つの例文を観察してみましょう。

(51) a. We have breakfast at eight everyday.

b. Mary gave us a good breakfast.

(52) a. Pity is akin to love.
b. It is a pity (that) you weren't there.

(51)と(52)から分かることは（51 a)、(52 a）の *breakfast*（朝食)、*pity*（同情）ようなゼロ冠詞の名詞では特に具体的な何かを指しているわけではないということです。それに対して、(51 b）の *a good breakfast* は *good* という形容詞が付くことで具体的なものを指しているということができますし、(52 b)は *you weren't there* ということに対してそれは *a pity*（残念な事）だと言っているわけですからやはり具体的なことを表しています。特に（51 a-b）について更に言えば、*have breakfast* は全体で１つの出来事として認識されており、*breakfast* それ自体を個別的に切り離してはいないと考えられます。つまり、客体化された概念としては認識されていないということです。そこでこの視点から (51 b) について考えてみると、*good* という評価を表わす語が付加されていることからも分かるようにこの場合には *breakfast* を個として客体化するという認識作用を伴っています。「a 名詞」は話者の記述対象の客体化に伴う個体認識の現れなのです。

このことは次の例でも同じです。

(53) a. John goes to school by bus every morning.
b. Bill missed the 7:30 train bounded for Los Angeles.

(53 a）では「バス通学している」ということが全体で１つの出来事として認識されており、バスそのものには特に意識は向けられていません。「特定のバスを指していない」という認識はこのことに起因すると言えます。それに対して(53 b)のように具体的な列車がイメージされると冠詞が必要になります。特に話し手と聞き手が同じものをイメージできる場合にはこのように定冠詞となります。

このことからゼロ冠詞の名詞と不定冠詞のつく名詞の認識の違いを次のような図で示すことができます。

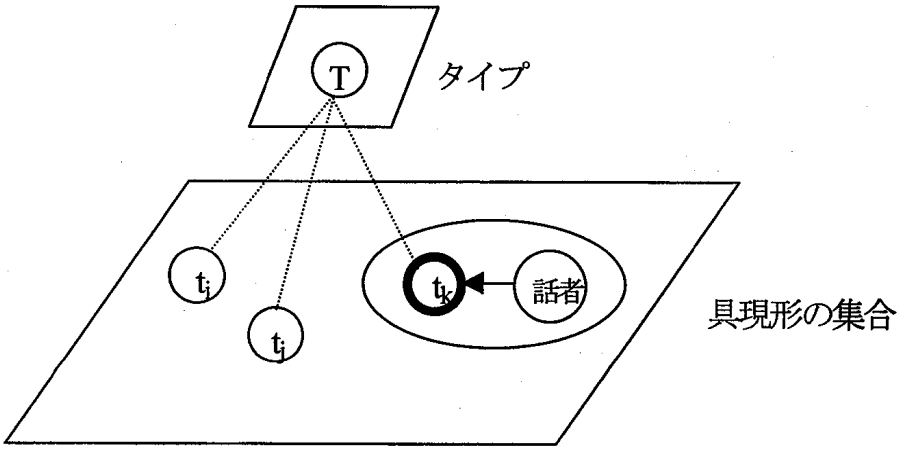


Figure 20

図 20 で「タイプ (T)」というのは具体的な指示物を持たない名詞概念で、これは言語社会の成員によって共有されている知識としての実体 (entity) です。たとえば私達は「ネコ」という語を聞くとある一定の特徴をもった動物を思い浮かべます。でもその時には特定のネコを指しているわけではありません。これを「タイプ」と言います。そして、この「ネコ」という名称で呼ばれる動物は潜在的に沢山いるわけですから、ここでは t_i、t_j、t_k で表しておくことにします。これを具現形 (instance) と呼びますが、ここで重要なことは「a　名詞」という表現は図 20 のように話者が発話の場面や経験と結びつけて指示物を知覚あるいは想起していることを意味しているということです。

では、このことを踏まえて次の文を観察してみましょう。

(54) I got lost on my way to your house, but <u>a woman</u> was kind enough to drive me here.

(54)の *a woman* という女性に話し手は実際に会っているわけですから特定の人を指していることは明らかです。それにもかかわらず不定名詞で表現されているのは聞き手にとってはその人は woman という語によって特徴付けられる誰かでしかないからです。つまり、そのように呼ばれる人は世の中に沢山いるわ

けですから聞き手にとってはその人は woman と呼ばれる集合の中の誰かということになります。そこで、このような話し手と聞き手のそれぞれのイメージを図示すると次のようになります。[5]

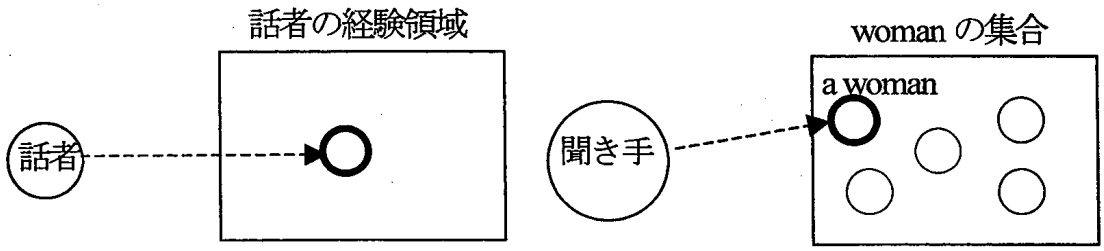


Figure 21

以上のことから、「a 名詞」と「the 名詞」の区別は話し手が聞き手の視点からある実体が同定可能かどうかを考えることに起因するということができます。

さて、ここでゼロ冠詞の名詞に話を戻したいと思いますが、先程述べました「タイプ」認識の場合には「特定の物を指していない（特定の指示物を持たない）」というのがその特徴でした。でも、ここでゼロ冠詞名詞をもう少し詳しく見てみると別の原理が働いているためにゼロ冠詞となっている場合もあることに気付きます。これはたとえば次のような場合です。

(55) a. I had <u>chicken</u> for dinner.
　　 b. I would like some <u>potato</u>.

結論的にはこれは対象物をどのように見ているかという違いで、これは次の図 22 のように示すことができます。

---

[5] ここで「a 名詞」についてもう少し付け加えると、話者にとっても図 21 の右側の図のような認識で「a 名詞」が使われることもあります。たとえば次の（i）では特定の人を想起しないで「大金持ちの人」という解釈も可能です。
(i) I want to marry a millionaire.
このような使い方を(54)を specific indefinite というのに対して nonspecific indefinite といいます。

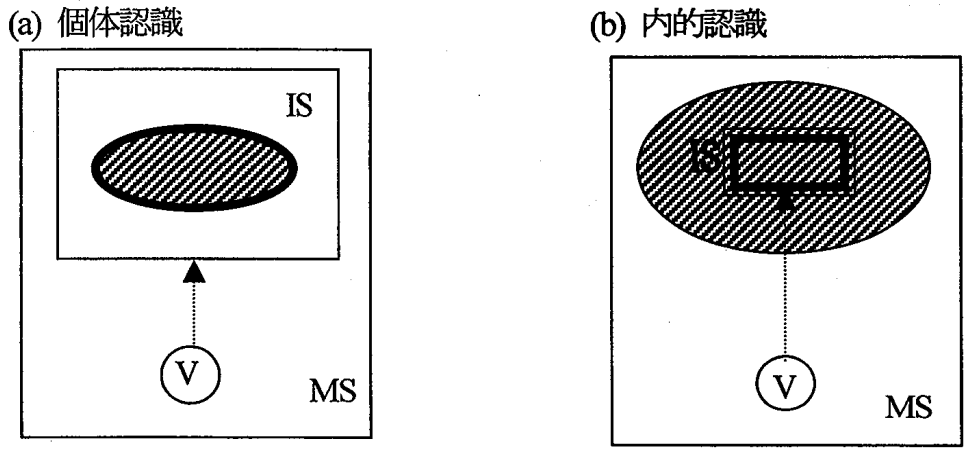


Figure 22

つまり、(55)の *chicken* や *potato* は具体的な物を指していますが冠詞がないのは図 22 b のような認識の仕方でそれぞれを見ているからなのです。そして、このような認識の仕方で物を捉えたときの特徴は「均質性」であると言うことができます。この「均質性」というのはその物のどの一部を切り取って見てもそれとして認識できるということです。一羽の鶏は *a chicken*、鶏肉は *chiken* となることから分かるようにその形を認識できる場合には図 22 a のように境界線 (boundary) を認識しており、その境界を認識できない場合には図 22 b のような認識をしているということになります。

ではこのことを踏まえて次の文を観察してみましょう。

(56) a. John is a merchant.
b. John is <u>merchant</u> through and through.

(56 a) に対して (56 b) で冠詞がない理由として *merchant* が形容詞的に用いられていると言われますが、ここで重要なことはなぜそのように感じられるのかということです。結論的には (56 a) の *a merchant* が *John* を職業という視点から分類している、つまり、*John* が *merchant* というカテゴリーの一員であることを述べているのに対して、(56 b) は *John* の性格の記述として *merchant* という表現が用いられていることから、前者は個体認識であるのに対して後者は

いわば名詞のもつ内的属性に視点を当てていると言うことができます。

そして、このようにゼロ冠詞名詞を名詞の指示対象の個体認識というより、むしろその内面を前景化した時の表現だとする特徴付けは次の例にも当てはまります。

(57) a. Hero as he was, he wept at the news.
b. Child as he was, he had enough sense to understand what she really meant.
(58) a. They elected him chairman.
b. John treated Bill like servant.

つまり、(57 a-b) の *hero* や *child* は文主語の「属性」を述べたものであり、(58 a-b) の *chairman* や *servant* は目的語である *him* や *Bill* の「役割」を述べたものだと言うことができます。

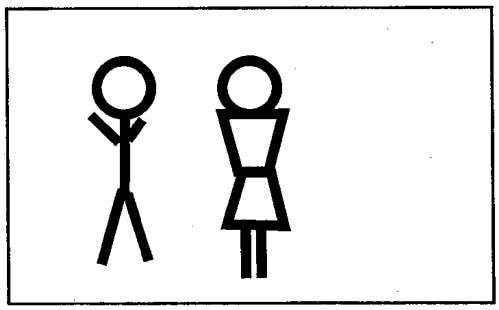
9．まとめ

小稿では認知言語学の視点から英語の言語現象を取り上げ、このような考え方が英語教育に役立つことを述べました。外国語としての英語学習では文法規則や構文の知識が重要であることは言うまでもありません。しかし、そこで重要なことは、たとえば受動文の「作り方」が分かるということは基礎的な段階として確かに大切なことですが、むしろ定着を図るべきことはその「使い方」であるように思います。このことは英語学習を言語運用の側面から考える場合にはごく当然のことであり、それを学習者の心に染み込ませるためには「英語を話す人達が出来事の認識の仕方と言語表現の関係」の理解が不可欠であると考えます。

最後に「英語を話す人達と日本語を話す人達の出来事の捉え方の違い」について一言述べさせていただけば、これは英語と日本語というそれぞれの言語を育んできた文化やそれを話す人々の精神風土と深く関係するのですが、2つの言語では出来事のどこに視点を置き易いかという点で大きく異なっています。

つまり、図23に示されるように「英語話す人達は出来事の中の人や物(特に人)に視点を置いて出来事を表現する傾向があるのに対して、日本語を話す人達はむしろ出来事全体に視点があり、その中の人や物はあくまでも全体の一部でしかない」(Ikegami 1991) ということです。

(a) 英語を話す人達の事態認識



(b) 日本語を話す人達の事態認識

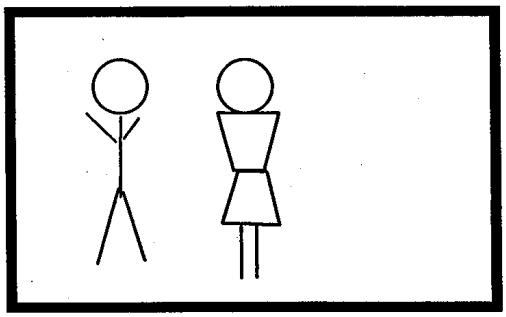


Figure 23

たとえば、この違いは次のような身近な発話にもよく見られます。

(59) a. We can enjoy a wonderful panoramic view of the town from the top of that mountain over there when it is fine.

b. 天気が良ければ、あの山の上から町の素晴らしい全景が楽しめますよ。

(60) a. Do you carry picture postcards?

b. 絵葉書ありますか？

このように英語では「誰が何する」という認識パターンで出来事を捉える傾向が強いのに対して日本語では出来事全体に視点が置かれ「誰が」ということが背景化されますから言語表現上に表されていなくても奇妙に感じないのです。[6]

[6] このような認識の違いは次の川端康成の『雪国』の冒頭部分とそれに対する英訳の違いからも明らかです。

(i) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

b. The train came out of the long tunnel into the snow country. (Ikegami 1991: 288)

そして、更に言えば、英語ではこの「誰が何する」という認識のパターンが慣習化し固定化していますから、そのメトニミー的な意味拡張による次のような表現、つまり「無生物主語構文」も不自然な感じを受けないのです。

(61) Independence Hall witnessed many historic events.

英語を分析的に知識として理解するのではなく、その運用的側面から英語教育を考えるとこのような英語を話す人達の出来事の捉え方を学習者の心に染み込ませることが非常に重要であることは言うまでもありません。

References

Comrie, Bernard. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University.

Dancygier, Barbara and Eve Sweetser. 1996. Conditionals, Distancing, and Alternative Spaces. *Conceptual Structure, Discourse and Language*. Adele E. Goldberg (ed.). Stanford: CSLI Publications.

Dirven, R. 1989. A cognitive perspective on complementation. In: Dany Jaspers, Wim Klooster, Yvan Putseys, and Pieter Seuren (eds.), *Sentential Complementation and the Lexicon: Studies in Honour of Wim de Geest*, 113-139. Dordrecht/Providence: Foris Publication.

Dixon, Robert M. W. 1984. The semantic basis of syntactic properties. *BLS* 10: 583-595.

Dixon, Robert M. W. 1991. *A New Approach to English Grammar on Semantic Principles*. Oxford: Oxford University Press.

Fauconier, Gilles. 1985. *Mental Spaces*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore, Charles. 1990. Epistemic Stance and Grammatical Form in English

Conditional Sentences. *Papers from the Twenty-Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society*, 137-62. University of Chigaco.

Gundel, J. K. et al. 1993. Cognitive Status and Form of Referring Expressions in Discourse. *Language* 69, 274-307.

Hamada, Hideto. 2002. *Grammar and Cognition*. Sapporo: Kyodo-Bunkasha.

Ikegami, Yoshihiko. 1991. 'DO-language' and 'BECOME-Language': Two Contrasting Types of Linguistic Representation. *The Empire of Signs*. Yoshikiho Ikegami (ed.). John Benjamins Publishing Company. Amsterdam/Philadelphia.

Izutsu, Katsunobu. 2000a. The S V O to V construction: its prototype and schema. *Asahikawa Studies in English Language and Literature* 9: 61-72.

Izutsu, Katsunobu. 2000b. Conceptual differences between the "equi" *ing* and *that* complements. *Asahikawa Studies in English Language and Literature* 9: 73-85.

Kageyama, Hiroyuki. 2001. Tadousei to Nijuu-mokutekigo no kaishaku. *Sapporo University Women's Junior College Journal*, vol. 37: 93-126.

Kasai, Seizo. 1997. *Eigogaku Engi*. Sapporo: Kyoudo-Bunkasha.

Kasai, Seizo. 1999. Mukanshi kou. *Culture and Language* 50, 65-84.

Kashino, Kenji. 1993. *Imiron kara mita gohou*. Tokyo: Kenkyusha.

Kiparsky, Paul, and Carol Kiparsky. 1971. Fact. In: Danny D. Steinberg and Leon A. Jakobo-vits (eds.), *Semantics*, 345-367. Cambridge: Cam-bridge University Press.

Konishi, Tomoshichi. 1980. *A Dictionary of English Word Grammar on Verbs*. Tokyo: Kenkyusha.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1: *Theoretical Prerequisite*. Stanford: Stanford Uni-versity Press.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2:

Descriptive Application. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 2001. Cognitive Linguistics, language pedagogy and the English present tense. *Applied Cognitive Linguistics 1: Theory and Language Acquisition*. (Cognitive Linguistics Research 19.1.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 2002. *A Course in Cognitive Grammar*. MS. University of California, San Diego.

Newman, John. 1996. *Give A Cognitive Linguistics Study*. Cognitive Linguistics Research 7. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Petersen, Mark. 2002. *Amazing Study of Real English*. Tokyo: Shueisha International.

Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sweetser, Eve. 1996. Mental Spaces and the Grammar of Conditional Constructions. *Spaces, Worlds, and Grammar*. Gilles Fauconnier and Eve Sweet-ser (eds.). Chicago and London: The University of Chicago Press.

Taylor, John. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.

Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1984. *A Practical English Grammar*. Ox-ford: Oxford University Press.

Tyler, Andrea and Vyvyan Evans. 2001. The relation between experience, conceptual structure and meaning: non-temporal uses of tense and language teaching. *Applied Cognitive Linguistics 1: Theory and Lan-*

guage Acquisition. (Cognitive Linguistics Research 19.1.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Verspoor, M. 1999. To infinitives. In: Leon de Stadler and Cristoph Eyrich (eds.), *Issues in Cognitive Linguistics*, 505-526. Berlin: Mouton de Gruyter.

Wierzbicka, Anna. 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Yamaguchi, Kazukiko. 2000. Complements and Layers: That-Clauses v. s. "Equi" To-infinitives. *Journal of Hokkaido Linguistics* 1: 59-70.